

## 反リベラルの運動理論

——ネオコンと資源動員——

同志社大学

鵜飼孝造

### 1 目的

この報告の目的は、「反リベラル」な社会運動が優勢となりつつある時代状況をふまえて、それが社会学理論のどこに源流をもっていて、どのような(政治的ではなく)理論的展開からリベラリズムが批判されるようになったのかを明らかにすることである。そのうえで、「反リベラル」に対して(政治的にではなく)理論的に対抗するためにどのような選択肢があるのかを示したい。(ここで、「反リベラル」というのは、社会的平等を目指す政策および運動に批判的な勢力のことである。)

### 2 方法

そこで、まず「ネオコン」とよばれるアメリカの知識人(その多くは社会学者)の理論を分析する。彼らは社会主義運動から出発し、1960年代のリベラルな政策にコミットした。そしてその挫折から、より合理的・効率的な政策と文化的保守主義を合体させた Neoconservatism を生み、大きな影響力を現在までおよぼし続けている。社会運動は広義のリベラリズムを基調としてきたが、「ネオコン」の台頭以降、リベラルな社会運動は守勢に立たされている。他方、同じ時期にアメリカに登場したのが資源動員の運動理論である。そこで、資源動員論はネオコン的運動に対抗しうるのか、あるいは何らかのネオコンとの通底点をもつのかどうかについて分析を進めたい。資源動員論は、社会運動の歴史社会学から生まれた研究と合理的選択をモデルにした研究の二潮流からなるが、二つの流れはどこで合流するのか、あるいは別の方向に進むのかについても分析を加える。

### 3 結果

分析の結果、ネオコンの社会理論は、政治・経済・社会・文化の領域間の矛盾を強調する点に特徴があることがわかった。たとえば、マイノリティの権利拡大は、その共同体が本来もっていた自発性や連帯を損なうとして小さな政府と伝統的文化への回帰を説く。資源動員論も、各局面の資源動員に分析を集中させ、戦略的有効性を重視し、予定調和的な政治発展論に批判的な点ではネオコンと共通の志向をもつ。しかし、歴史研究から得た知見から、市場経済そのものとは別に、資本主義が国家に収斂する独占的動員過程があってはじめて発達したこと、あるいは合理的選択にもとづく運動モデルを構築する際にも、公共性に関わる領域では強制や排除など非市場のプロセスが決定的であることが強調される。さらにネオコンが前提にしているナショナルな境界は資源動員論に存在しない。

### 4 結論

以上から、ネオコンと資源動員論は合理主義的政策志向を共有しつつも、異なる視角をもつことがわかった。しかし、資源動員論は「反リベラル」に対抗しつつ、格差や排除にいかなる運動論的解法を提供できるだろうか。そのためには、政治アリーナでの動員のみならず、非政治的・非市場的资源をいかに発掘し、反リベラルに対抗して活性化し、さらにそれを新たに結びつけ・組み合わせていくかという資源の「交差」と「編集」の理論が求められる。

文献

鵜飼孝造, 近刊, 『資本主義の社会学』